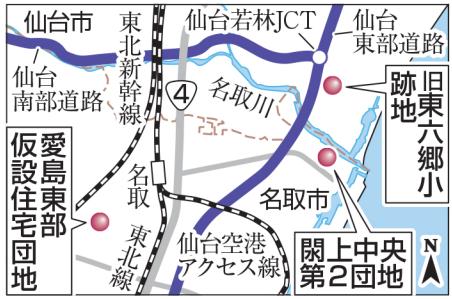


第3期第12回詳報

311

次世代塾

伝える／備える



大学生らが東日本大震災に向き合う通年講座「31」
1『伝える／備える』次世代塾第3期の第12回講座は18日、仙台、名取両市の災害公営住宅や仮設住宅などを訪問し、受講生約80人が生活再建を学んだ。

仙台市若林区では津波被災した後、東六郷コミュニティで長沼さん（左）の話を聞く受講生
=2020年1月18日、名取市愛島の東部仮設住宅団地

イ・センターで、市社会福祉協議会の生活支援相談員秋谷智明さん（49）と、同区六丁の日西町災害公営住宅に暮らす熊谷芳一さん（72）の話を聞いた。

秋谷さんは相談員の活動を振り返り、コミュニティ立健康状態の悪化や生活の困窮などの課題を列挙。「被災者が抱える苦悩を知り、自分がと捉えて伝えほしい」と求めた。熊谷さんは「入居当初は顔見知りがいなくて不安だ

つた。秋谷さんが話を聞いてくれたり、助言してくれたりしたので、前向きに考えられるようになった」と支援に感謝した。

名取市では閑上中央町内会の集会所で、震災で自宅を流失した町内会長長沼俊幸さん（57）らが講師を務めた。閑上地区では行政による観光施設の整備が進む。長沼さんは「将来的に必要なものだと思う。だが災害

生活再建の課題実感
被災者に寄り添い支援を

再建したりして少し落ち着き始めた被災者は、開発のスピードに気持ちがついていけないと述べた。長沼さんが約6年間暮らした後、自治会役員を務めた同市の愛島東部仮設団地も訪れた。秋谷さんは「被災者の苦悩を知り、自分が成長して部屋が狭くなかった事例を説明した。

「被災者の実態に合わない法律の規定で借りられない理由で空き部屋の借用を市役所に打診したが、法律の規定で借りられない」と訴えた。秋谷さんは問題点をあわせてほしい」と訴えた。

被災者一人一人の生活と心の回復を促すことが、復興につながると考
えました。被災者と行政の間に意識の溝があることも実感しました。両者が目標を同じ方向に据えて取り組むことが重要だと思います。（仙台市青葉区・東北大2年・栗原史昂さん・20歳）

受講生の声

担当の東北福祉大インターナンスは次の通り（敬称略）。3年内村大樹△2年鈴木真羽、武藤有沙

受講生の声

つながり強めたい

善や若者の積極的な関与も必要。ボランティアなどに関わり、地域とのつながりを強めたい。（長沼市・宮城教育大学3年・岡崎悠太さん・20歳）

つながり強めたい

復興は家や道路だけでなく、被災者の生活が再建できて初めて成し遂げられると感じました。法制度の改

つながり強めたい

若者の力が必要という話が印象になりました。高校1年から語り部をしていました。大学進学後は多忙で時

つながり強めたい

若者の力が必要という話が印象になりました。高校1年から語り部をしていました。大学進学後は多忙で時

つながり強めたい

被災者一人一人の生活と心の回復を促すことが、復興につながると考

つながり強めたい

被災者一人一人の生活と心の回復を促すことが、復興につながると考

つながり強めたい

被災者一人一人の生活と心の回復を促すことが、復興につながると考